

発達した虎口を有する山城

いま じょう あと 今 城 跡



土豪の城から美濃金山城の支城へ

今城とは

天文年間（1532～1555）頃に地元の土豪である小池家継が築いたと伝えられています。

この小池氏は、美濃金山城に森長可が入城した後、今城を退去して農民になったと伝えられています。

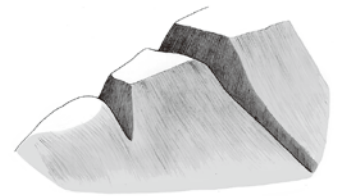
今城の歴史的背景

城自体は小さいですが、横堀を巡らし、曲輪を堀切・土塁で区画するなど戦国末期の技巧的な縄張りを用いています。この状況から、天正10年（1582）以降、美濃金山城主である森氏によって改修されていることが推測されます。

特に周辺の状況と考え合わせると、天正12年（1584）における小牧・長久手の戦いの際に改修された可能性が高いと思われます。

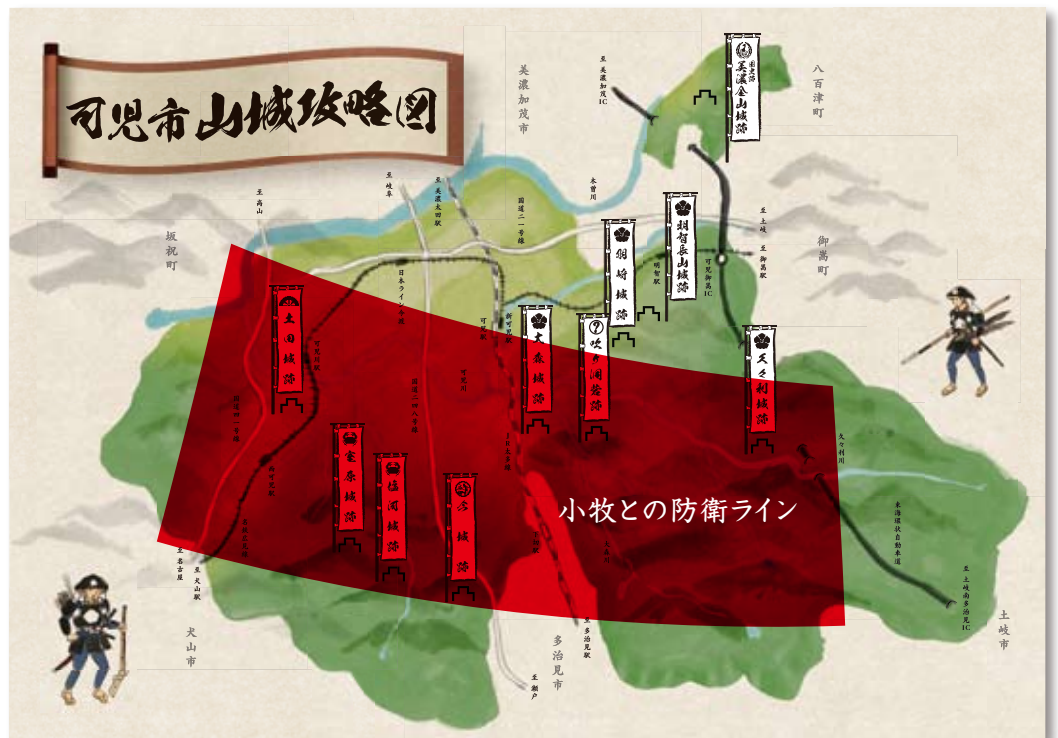
堀切

尾根を断ち切るように設けられた堀のことで、尾根伝いに敵が侵入するのを防ぐための仕掛けです。



今城跡縄張り図

（『可児市史』第1巻より転載）



今城跡のココに注目！

土橋

堀を渡るために設けられた土の橋です。一度に多くの人々が渡れないよう敵の侵入を分断するための仕掛けとなっています。



土塁

本丸には高さ1m前後の土塁が巡っており、誰が見ても明らかに残りの良い状態です。



枡形虎口

城や各曲輪への出入り口のことを虎口といい、今城の虎口は土塁で四角く囲んだ枡形虎口となっています。その形態から小牧・長久手の戦いの時期に導入されたものと考えられます。



切岸

敵の侵入を阻むため、曲輪の周辺斜面を断崖のように切り盛りしたものを切岸といいます。

